
外道の王

闘神自殺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外道の王

【Nコード】

N1880Z

【作者名】

闘神自殺

【あらすじ】

他のサイトでも投稿しています。

PKプレイヤータクの外道にして卑劣なる日々。

狡猾に生きることを信条とする高校一年生のタクはある日……ゲフンゲフン。

ハイエナ稼業

ある春の日のことだった。

くそドケチな王様に「50Gと銅の剣やつから魔王殺つてこいや」と低姿勢でお願いされた勇者ノックさん。

大魔王はとても強大だった。

そして大魔王に付き従いし魔王六将は、一瞬にして天気を変えたり、一瞬にして大陸の形を変えたり、一瞬にして子供の財布から小銭をちよるまかしたりする超強大な魔力の持ち主だった。

スライム相手にすら大苦戦するノックさんは即座に、「やだよつ！ 死ねよテメエ！」と、お里が知れるようなスラングかまして首を横に振る。が、それまで温和であった王様は直後、顔を鬼のように豹変させ、逆さに落とした親指で首をカツと横に切り、直ちに「勅命」（逆らうと殺す）を下す。

『そ、そんな……馬鹿な！』

絶体絶命大ピンチ。

ノックさんはガツクリ膝を落とし、絶望的な顔で天井を仰ぐが、王様はそんな情けない姿を見ても「プー、クスクス」と頬袋を膨らませて喜ぶだけ。

このままでは殺られる。

ジジイのなんとなくな気まぐれで殺られる。

あんまりな無理難題に、ノックさんは屠殺される前のウサギのよう

うに震えた。

（……どうせ）

ノックさんの眼に微かな火が点った。

（どうせ死出の旅に出されるくらいなら、いつそ……！）

恐怖が一転して暗い憎悪に燃えたノックさんは、まだイヤミった

らしく笑っている王様を睨み上げ、懷に隠し持っていた短剣をギュッと握り締めた。

「だけどノックさんはしょせんノックさん。」

王様は戦闘向きの職業ではないけど、それでもノックさんと比べればかなり強いし、おまけに攻城兵器の直撃弾ですら受け止める不可視の強力な魔導障壁によって守護され、大磐石の構えで下々の輩を謁見に招いている。護衛すら付けてない余裕っぷり。

「だけどノックさんはそんなことは知らずに、臆することなく前に出る。いや、臆してはいたかもしれない。」

「お、往生せいやああ！」

「ぬわーっ！？」

ノックさんは旅の仕度金を受け取ると見せかけ、王様の懷に倒れこむようにして心臓を一撃した。

王様は鮮血に染まる左胸を押さえ、唇を慄かせ信じられないと云った表情でかぶりを振り、後ずさりながら玉座にもたれ掛かり、遂には生命活動を停止　死んだのだ。

「やた！　やったあ！」

死体の前で小躍りするノックさん。

調子にのって魔導障壁に肘が当たり、電撃のようなバチツとした衝撃に「アチツ！？」と悲鳴をもらすノックさん。

ドジなノックさん。

だがそれでも王は死んだ。

玉座の前で果てている。

そして後に残ったのは元王であった男の遺体と……大きな疑問。

一切の抵抗もなく強力な結界をすり抜けたノックさんのその腕は、ポタポタと滴る鮮血に染まっていた。

翌日。

【城下町・噴水広場】

『ふん、こんな小汚いジジイの肖像、全部焼いてしまえ』

王様職ゲットして調子ノリまくりのノックさんがそこにはいた。

兵士達に命じて前王の痕跡のいっさいがっさいを城下町の噴水広場で焼き払い、さらには抵抗する王の側近とその家族を全員縛り首にして、市民に絶対的恐怖を植え付けていた。

【深夜の街外れ・ラーセ教ファルン教会】

『フン、ワシの国に人心を惑わす宗教なんぞ不要だ。この馬鹿でかい教会も焼いてしまえ』

『や、やめてください！！！』

松明を掲げた兵士100名が命じられるまま教会をぐるりと取り囲むと、教会の神父が大慌てで止めに入ってきた。

『よいですか！ 我がラーセ教は大陸に本山をかまえる信徒20万人の大宗教ですよ！ いくら王様と云えどこんな勝手はゆるされません！』

『邪魔ナリ！！』

『天よー！！』

ノックさんは神父を蹴飛ばし、前王から奪い取ったみことな宝剣で、尻モチをつく神父の額を突き刺した。

『やめてください！ なんといいことを！』

『邪魔ナリ！！』

『ジイーザアース！』

止めに入ったシスターをバツサリ袈裟斬りするノックさん。恐るべきノックさん。

悪鬼羅刹と云えど今のノックさんには及ばないであろう。

『王様、中に子供達が大勢います。全員孤児達です』

『フン、移民を片っ端から受け入れるほど寛大な国じゃない。ちょっといい。見せしめだ、焼けイ！』

『あ……は、はい！ わかりました！』

あんまりに無慈悲な命令に対し兵卒は戸惑った。

これでいいのか！！

こんな世の中でいいのか！！

王を止められるのは今ここにいる自分だけじゃないか！？

と葛藤はしたものの、特に自分の胸が痛いわけでもないし、外でチマチマ稼ぐよりかなり割が良い職業なので、兵卒は部下に号令していつせいに火を点けさせた。

八方から火を点けられたちまち燃え上がる教会。予めたつぷり獣油をかけた純白の壁は無惨にも溶けて焼け落ちていく。

『ぎゃあああ！！ 熱い！ 熱いよおお！』

『出して！ 出して！ お願いいいー！！』

遠巻きに見ているだけでも肌を焼くような劫火が教会をゴウゴウと燃え上がらせた。赤く染まった教会からは、耳を塞ぎたくなるような子供達の悲痛な叫びが漏れて来る。

『おい！！』

『は、はい』

ノックさんが、羊の毛並みをしたカバのような体格の馬上から軽くアゴをしゃくると、長槍を構えた武装騎士が、火に追われ外に逃げ出そうとする子供達の手や顔を次々に突き刺した。

顔を出せば殺されると解っていても熱や煙に迫り立てられた子供達は苦しさのあまり耐え切れず、留まることなく手足を隙間から這い出させ、そして無惨にも殺されていった。

『ぎゃっはっはっは！ あー、おかし！』

オンラインRPG・YMR。

壮大なる世界の一端で起こった1つの物語の幕開けであった。

俺はタク。高校一年生。

ちよいと理由があつて”今作の”YMRは初心者で参加している。今は自宅の自室に籠もり、パソコン画面を通じて、キャラクター・エディットで作成したキャラをオンライン世界の待合広場で試しに操っている。慣らし運転中というヤツだ。

蹴り、蹴り。

フック、ジャブ、ロシアン・フック、ジャンプして二階の縁にブラーンと掴まり『ブラ』サガリ（高位のジェダイのみが使える必勝闘法。ブラ下がった状態から敵にカウンターを仕掛けるという、死中に活を見出す一発逆転の大技）』

チュートリアルで前作との動作の仕様変更を一通り確認した俺は、受付に敷設されている転送機の画面から契約したサーバーを選択し、画面に表示された島内マップを指でなぞってカーソルを移動させ、安全そうな転送場所を選んで決定ボタンを押した。

青紫色の無数の光の輪に全身が覆われると体が光の粒子へと換わり、大きな光に包まれたかと思うと次の瞬間には転送先の町役場へと立っていた。

『はいはい！！ ガルンド城塞攻略イベント受付終了です！ 次の番号札をお持ちの方どうぞ！！』

『再審の申請書ですね？ 受付カウンターの三番へとお並び下さい！』

『おい、さっきここに並べって言われたぞ！？』

『お客様、クレームなら七番の』

叩き売りでもやってんのかと云う物凄い喧騒がそこにはあった。株価でも暴落してんのかという勢い。

安全Ⅱ公共施設。考えが浅薄だった。

十五階建ての白亜の施設に常駐する十数名の警備スタッフは一般プレイヤーから有志を募ったボランティアだが、数世代前からYMRの歴史を知る精鋭揃い。そこそこの軍隊が襲って来ても持ち堪えられるほどだ。逆に言えば、やろうと思えば襲撃できちゃうわけなんだが。

次からは移動場所をさらに一考するでしょう。

イベント申請やクレーム対応などでごった返している役場からどうにか外に抜け出た俺は、各所に設置された案内板に従い、この国の中央に位置する公園の噴水広場を目指す。

何もしてないのにもう疲れた。

空は一点の曇りなき青空だった。

チリひとつ無く舗装された石造りの道。

周囲に生い茂る陽射しに映える緑が目眩しい。

水源が豊富なこの土地では移動に小船が使われることが多く、船が通れるようにと道の至る所にアーチ状の橋が架かっている。その橋をいくつか渡ると、広大な森林に囲まれた公園の噴水広場へとたどり着いた。

空色の大階段の上から一望した広場はかなり見通しが良く、もしイカれたヤヴァイのが「死ねやオラ！」と襲ってきても一目散に逃げることが出来るだろう。そこかしらに散見するカップルは不快だけれど人の流れ多いし、とりあえずの安全地帯と言える。

（ま、雰囲気を掴むためにちょっと話しかけて見るか）

俺は周囲を見回して、ふと目に付いた木陰の静かな場所を選んで移動した。

『あの、少し訊いていいですか？』

『ン？ なに？ どうしたの？』

いきなり上級者に話しかけるのは少し腰が引ける。街灯の前のベンチで独り退屈そうに足を遊ばせていたアマゾンに軽くアプローチしてみた。

『初心者なので、もしよろしければ、この街のことを教えて頂けませんかでしょうか？』

『ン……どうしょ？ ねえ、ミッキー？』

断じてナンパではないが、誤解したアマゾンは少し照れたような

モジモジした風な態度で後ろに隠れていたゴツイのに話をフツた。
手招きされてのっそり出て来たソイツは、亀の甲羅を連想させる重
厚な緑の鎧を着込んだ大型の戦士だった。

(遠くに立ってたから他人かと思った)

『べつにいいんじゃないかな？ 初めまして、^{グレート・ソルジャー}『超戦士』をやつて
るミッキーです』

『あ、どうも。^{ナイト}騎士の”タク”です』

『超戦士』とは、ギルドに所属する戦士が五度のジョブチェンジ
を経て成る、戦士系の最強キャラ。最低でも1500Lv以上とい
うことだ。

コイツと比べりゃLv2の自分なぞ虫ケラ同然。

まさに雲の上の存在。

『ハハッ、緊張しないでいいよ。べつに取って食おうとしてるわけ
じゃないしね』

だが大仰な外見とは違い、ミッキーは意外と礼儀正しい人だった。
可愛らしい名前からして女性かな？ 少し年上かも。

『この国は大陸から南東に位置する孤島で、経験値稼ぎにもってこ
いのモンスターが棲息するダンジョンがあるから、けっこう人の出
入りが多いわ。ここでしか取れないレアアイテムも多いし、彫金に
最適なレアメタルも発掘されるので貿易関係でも潤っている。でも
最近王様が代わってから、島外の 別のサーバーからの新規流入
者が減ったの。王様がムチャクチャ言つて、街中での”PK”

戦闘向けじゃない一般プレイヤーへの攻撃まで推奨してるから、略
奪があちこちで多発してる』

『この辺りは中立地帯だよ。噴水広場を挟んで北側に王都があつて、
その王都を茎として扇状に右から商業区、ギルド、闘技場、市街、
海商区、高級住宅街があるわ。それぞれの区には元締めがいて王様で
も勝手は出来ないの。今のところ城下町でしか酷い政策は打ち出さ
れていないわよ』

ミッキーに続いてアマゾンが親切に教えてくれた。チラッと歩い

た限りでは穏やかな景観しか印象に残らなかったが、どうやら治安は相当悪いらしい。

『まだレベル低いみたいだし、キャラ捨てて別のサーバーに替えれば？』

去り際にそうアドバイスしてくれたアマゾンには、余ってるからと言って、俺に『クリスタルソード』を渡してくれた。

感謝……圧倒的な……感謝つつつ！！

俺はその場に膝を着き感涙した　フリをした。
アマゾンがギョツとして、ミッキーに隠れながらそそくさ立ち去って行ったのが何か心に残った。

『クリスタルソード』ってのはそう珍しくない武器だ。
魔法によるステータス異常を半減、または無効化させられる安定した特殊能力あり、魔法を使えない戦士系のキャラは中盤でけっこう重宝する。確か売ればそこその金になるはず。貰ったモン即行で売るほどセツパ詰まっちゃいないけどな。

さあて、どうしたものか。

ま、俺のやることと云ったら1つしかないが。

俺は人道を外れたクソ外道プレイヤー！。

人狩りが趣味のハイエナ野郎だ。

そんな周到な俺が操作しているキャラは見た目どおりのヘボキャラではない。前回のYMRで手塩にかけたキャラを特殊なアイテムで今作へとコンバートしたものを使用している。

宝石など金目の道具を大量に持たせ新規に引き継いだ俺の”タク”は、そのアイテムを売り払って集めた金でマジックショップへ赴き、能力値補正アイテムをありったけ購入して1つの能力値だけを突出させ強化している。

スピード 逃げ足を。

このキャラ、外見こそザコそのものだが、足の速さ”だけ”は天下一品。特に足が速いとされる高レベルの忍者や盗賊に追っかけられてもそうは捕まらない。

だがそのために足の邪魔になる装備は最軽量に留めているので、事情を知らぬ他人様には一見貧相な坊やに映っているだろう。

足を早くした狙いは取りこぼしのアイテムを拾うハイエナとして狡猾に生きるためだ。

高校受験のために10ヶ月遅れで参加を果たした俺がてっとり早く強くなるためには、多少の奸智を働かさねばやっていけないのだ。だから俺は謝らない。

さっき話したミッキーとアマゾンのように、誰か強いキャラの後ろにひつついておこぼれを戴く。そんな生き方もあるだろうが、それは正直嫌だ。受け入れられない。人に媚びるぐらいなら殺して奪い取る方がいくらかマシだ。

俺は殺られるのは好かないが、正直”PK”は上等である。

俺は行動を開始した。

クリスタルソードは今のところ必要ないので、近くに居た初心者っぽい騎士に5000ボルふっかけて売っ払い、その足で城壁の外冒険の舞台へと赴いた。

ゲーム開始から数時間、何度「この泥棒！」という台詞を聞いたか。

一撃喰らえば即死確実の雷撃や火炎、斬撃を避け、黙々とアイテムを集めては売り払い、たまにレアアイテムが出ればとりあえず貸し倉庫に突っ込む。そんなことを繰り返し半日もすればひと財産どうにもならないイレギュラーで一度死亡したが、金はこまめに預

けてたのでマイナスは少なかった。

『ふふん　ぬふふん　』

荒稼ぎして帰還した、鼻歌混じりの俺を待っていたのは、街の東南にある役場の掲示板に張り出された賞金首の顔写真。

王殺しや国際テロスト犯などのそうそうたる超A級極悪人どもと
いつしよに、いつの間に撮られたのか俺のキャラのキャプチャーが
張り出されていた。

予想していた結果だけに苦笑しかこぼれない。俺は完全にお尋ね
モンに成り下がっていた。

WANTED　賞金3600ボル

ハイエナのタク（騎士）

久しぶりのネットゲだったし、終始追っかけ回されて精神的に疲れた。手持ちの不要なアイテムを換金して銀行に預け、俺は早々に口グオフした。

今回は強化アイテムを購入した差し引きで、収入は1万7000ボル。初期にしちゃ悪くない。その中で消費レア・アイテム『死神の怨讐』と『護りのタリスマン』を手に入れた。

『死神の怨讐』は、使用すると自分を殺した相手の居場所をどこにいても捜し出すアイテム。『護りのタリスマン』は、アイテムソケットに突っ込んでおくと、自キャラが死んでも、アイテム損失や経験値ゼロや所持金半分などのマイナスペナルティを受けずそのままの状態で蘇生する。

どちらも使えば無くなるがレア度は十段階の評価で星五つ。
満足満足だ。

予想以上の釣果に頬を緩ませながら俺はPCの電源を落とした。

さて、ゲームが終われば作業ゲーのような日常が待っている。

けっこう汗かいてたからまず軽く風呂入って、それからメシを食いに外出する。

ファミレスでメシ食った帰り道にコンビニ寄って、烏龍茶のペットボトルとビーフジャーキーとジャンプ買って、商店街のゲーセンで新作の格ゲーちよいとつまみ食いして、それから家に戻った。

「ただいま」

誰もいない薄暗い玄関。

両親は共働きなのでけっこう家を空ける時間が多い。

居ないと知りつつも帰りの挨拶を欠かさなのは寂しい現代っ子のサガと言えよう。

二階の自室に戻り、PCに電源入れてBBSをチェック。スレッド形式の掲示板を流し読みしていると、俺の名前がほんのチラリとだが載っていた。

【獅子王】

足の速いのにいきなりやられました

【桂歌麿】

最悪だな 今度見かけたらシメときマス

【獅子王】

きつと寂しいヤツなんだよ

【ジャクソン5】

つつかあの島PK多くね？

【ひゅんける皇帝】

難易度も鬼高い

レベル732の聖騎士が地下4階で鬼蜘蛛の大群にウボア

【ドモホルンリンクル】

誰か輪廻の数珠玉ゲットしてね？

最後の一個手に入らんわ

ふむふむ……。

まあ初日だし、悪評はこんなところか。

気に入りのエロサイトを巡って更新をチェックしてからメールBOX見て、今度こそ電源を切った。

マジで疲れた。

もうオナニーすんのもめんどクセえ。寝る。あした学校あるし。じゃあな、暗転だ。

翌朝。

俺は学校での時間も惜しみ、持ち込んだモバイルでキャラクターの効率的な動作を模索し組み合わせていた。

キャラクターは別売りのツールを使用すると細分化されたモーションを選別して、他人のキャラクターと挙動を差別化することができる。数百種類の動作の掛け合わせ組み合わせでアルゴリズムを組み、自分だけの完全オリジナルキャラクターを作成するのだ。

少し難しいことを言っているみたいだが実際使い慣れればそんなに苦労しない。素人でも、一日いじつてれば簡単な動作を組めるだろう。こんな感じにカユイところに手が届く仕様がこのゲームの人気のひとつでもある。

俺は自作のパッチを当てて自宅パソコンのUSBを通じモバイルにデータを送信した。今はそいつで少々念の入った『コンボ（連続技）』を組んでいる。

逃亡専用動作を。

【土下眠】

かのロシアンファイターが慣行した、文字通りうつ伏せに寝る、土下座を超えた究極至上の謝罪。

デフォルトキャラは腰より下への攻撃は簡単に出せないから緊急

回避としてはもってこいだ。

【土下眠ローリング】

土下眠のまま横に回転する、修学旅行の就寝時などで、ちょっと浮かれすぎな奴がやらかす高速回避運動。

【目潰し】

対象に砂をかけて逃げる。

【目潰しダブル】

対象に連続して砂をかけて逃げる。

【肛門エクセレント】

組み合わせた指先をドリルと化し、敵の肛門を破壊して便秘にする（ゲーム内はリアルを追求しているので食事や排泄や就寝まで設定され、日常習慣を怠るとパラメーターに影響する）。

プログラムが大方組み終わる頃には学校が終わり、俺は迷わず家に帰った。

「ただいま」

誰も居ない家で挨拶を欠かさない。

アイ・アム・寂しい現代っ子。

部屋に戻り、制服の上着をハンガーに架けるついでにPCの電源を入れる。効率的だ。

さあて、現実逃避タイムといきましょうか。

苦心して組んだモーション・プログラムをプロパティでキーボードの各キーに配置し、軽く動作チェックしてみる。極力無駄を排した俺の”タク”は、予想以上とまではいかないが、なかなか鋭敏な動きを魅せた。

準備万端拔かりなし。

俺は拠点としているメインサーバーを選択してキャラクターを起ち上げた。

街全体を覆わんとばかりに高い壁の海商区の湾内。頻繁に船の行

き来があり、卸売り市場があり、人と荷の流れが激しいので、ボサツと立っていると人波に押し流されてしまいそうなほどの活気がある。

人の波を抜けて埠頭に着くと、海のように青い屋根が眺望できる『貸し倉庫街』へたどり着く。

入り口を重厚な兵装の騎士とゲートで監視している貸し倉庫街は海商ギルドが一括管理しており、俺は受付で持ち主に賃金を振り込んだ。

自動振込みにしてもいいが、ギルドや貸し金の勧誘が鬱陶しいので遠慮している。

賃貸料は月に5万5000ボル。

けっこう……安くない出費だ。

だが安場の倉庫では窃盗に遭うことも珍しくないので必要経費だ。こんな治安の悪い……俺のようなPKがうろついている国では特にそれに、ゲートを護る兵が世界最強の『ダチカン竜鬼兵』であるということを考えれば安いものだ。ただの一兵で千もの兵と互角に戦える海竜の軍団。

俺も一度イベントで遭遇したことあるが眉唾ではない。

緑青色のフルアーマーを着込んだ、戦車を彷彿とさせる超重装甲の騎士が一撃で戦況をひっくり返したのを見たことがある。

今思い返しても不思議だった。

ダチカンが放ったアレは何だったのか。

目の前で冒険者の一団が音も無く倒れた“アレ”は。

そのうち自分の倉庫や自宅を持ちたいが、今はそれに掛かる費用分、自分を徹底して鍛えることにしている。

俺はキャラを巧みに操り、盗人やPK、宗教やギルドの勧誘者と距離をとりながら何事もなく街の外へと出た。

城下町とは対照的に緑が極端の少なくなる荒涼とした山岳地帯。ザラザラとした岩肌に沿って、なるべく強力な魔物が出没する場所へと向って歩いた。

昨日半日遊んで解った。

このゲームの性能は前作と比べ物にならないほど向上している。操作に慣れるにはまだまだ時間が掛かるだろうし、となると単独でパーティーをストーリーキングするにはリスクが大きいと思う。

ならば相手が多少高レベルでも構わない。包囲網を作れない単独プレイヤーを狙って自慢の脚でお宝の略取を狙う。ちまちま稼いで目を付けられるより、よりはその方がよっぽど安全だしな。

そんなことを考えながら二時間ほど経っただろうか　目の前で突然声が響いた。

『あの、すみません！』

その声は個人宛ではない全体へのメッセージで寄せられたが、近くには俺しか居ないので声の主は当然俺に話しかけたことになる。

『すみません、誰かいますか！』

『……はい！』

俺は不審に思いながらもつい好奇心に負け、声の元を探って林の方へ踏み入った。

枝葉の少ない細い木々が高くそびえ、その狭い間を数十も歩かない内、急に視界が開けた場所に出る　とそこには、沸騰したように泡立つドス黒い沼地が視界一面に広がっていた。

ボコボコボコ……ボッコチャン……！

『……えっ？』

今ボッコちゃんて……？

いやそんなことより、タールのようにネットリとした真っ黒な沼

地の淵に白銀の鎧を纏った屈強そうな神騎士がうつぶせに寝そべっていることの方が問題だ！

何やってんだこいつ？

身動き……取れないのか？

手足を力サカサさせてたから一瞬白いGかと思った。俺は頭の上に疑問符を浮かべつつ白銀の神騎士に近づいてみる。

『あのー、なにかありました？』

『よかった！ す、すいません、その……なんか黒い場所を通ったら急に倒れちゃって。ずっと動けないんです』

『……』

神騎士がウンウン唸りながら言った”黒い場所”とは、マヒの沼のことだ。短時間なら問題ないが長時間ガスを浴びると文字通りマヒ状態に陥る。

神騎士と言えば俺の扱っている騎士の最高ランクに称された伝説のジョブで、おまけに身に着けてる装備の数々は一見するだけで解るくらいの超レアモノ。以上の外観から判断するに目の前の神騎士は超上級者のはず。

でも神騎士クラスでマヒの沼に引っかかる奴なんて嘘でも聞いたことない。マヒの沼とはそのくらい初歩的なトラップなんだ。説明書にだって回避方法やマヒを受けた後の対処法などがいくつも書き連ねている。

たぶんコイツは、かなりやりこんでいる常連の誰からキャラクターを受け継いだばかりの……初心者だろうな。

『すいません！』

『あ、はい』

『もう二時間もここにいます。これって機械の故障とかでしょうか……？ お兄ちゃんが留守の間にパソコンをいじってたらこんなことになって……』

『それは大変ですね』

俺はそう相槌を打ちながら、倒れて動けないでいる神騎士の前で

おもむろにしゃがみ、ガスを浴びすぎないように気を配りながら装備品の物色を開始した。

『ちょ、ちよつと！ なにをしているんですか！？』

神騎士はびっくりして必死に身をよじる。

まあ無理もない。

救いの主が追いはぎを始めたのだから無理もない。

ま、だけど初心者には親切にすべきだ。

俺はその精神に則って一応答えてやる。

『うん、窃盗』

『な……！？』

俺の酷薄な台詞に神騎士は息を詰まらせ言葉を失うが、そんな反応されても一向にかまわない冷酷無比な ある意味ゲームとして正しく外道キヤラになりきっている俺は、興奮する気持ちを抑えられず、脇目も振らずとにかく片っ端からアイテムウインドウにお宝を移動させ続ける。

画面の右隅に映るマップを見ても近くには誰も居ないし、超豪華なお宝を余裕で独り占め。宝クジにでも当選したような絶頂気分だ。

『やめてください！ これ、お兄ちゃんの勝手に使ってるだけで、

私のじゃないの！ お願い！』

『あ、そう？ じゃあ、お兄さんが悪いよ。パスワードの管理に不備があったんだ。ま、お兄さんが間抜けだったということだ』

『本当にお願ひ！ やめて！ だれか！ だれかー！ーっ！！』

『無理無理。いくら大声で話しかけてもマップ上に誰も映ってなきや絶対に届かないって。悪いけど、こういうのもゲームの内だからさ』

『……』

神騎士はあきらめたのか返事をしなかった。

気の毒ではあるが悪いとは思ってないしやめる気もない。

ハハッ、こんな楽なハイエナは初めてだ！

意気込んでキヤラを強化した甲斐が無いってものだね。

現実世界の俺は椅子のリクライニングを利かせながら缶コーヒを啜る。余裕たっぷりクソガキっぷりである。

だが俺は忘れていた。

あまりの幸運に気を取られ周囲の警戒を怠った。

長いブランクの所為か……忘れていた。

ルール無用のこの世界では、ほんの些細な油断が命取りに繋がるということパーフェクトに忘れていた。

突如、画面上の右隅から蜂の巣突付いたように増大する赤の光点。それも1つや2つなどではない。10以上もの大群。それは出現と同時に一直線にこちらに進路を向けた。

赤色の表示。

それは俺の御同業……頻繁に”PK”を行うプレイヤーを意味していた。

『な……やっべー!?』

気付いたときにはすでに遅い。

俺と神騎士を囲む敵の包囲網はきっちりと組み上がっていた。

【暗黒司教】あんこくしきょう

LV3650

初期の修道士からカルマを重ね闇属性に転じると、魔神崇拜を教義とする闇の司祭となる。

魔神の加護によるステータス補正。

攻撃魔導に長けた魔術のスペシャリスト。

司教クラスへの転職は信徒の投票によって選任されるので非常に難易度が高い。

【邪覇剣士】じゃはけんし

LV1570

LV270

中級レベルの魔王を単独撃破した者にだけ与えられる特殊ジョブ。
呪われた全ての武具が装備可能。

騎士系では神騎士と双壁を成す剣士の最高峰。

ダイナソー・マスター

【竜調教師】

LV1230

LV911

LV822

ドラゴンを操り敵と戦うトレーナー系のジョブ。

調教したドラゴンは種類によって騎乗も可能となる。

ドラゴンはモンスターの中でも最大クラスのステータスを誇るが、育成に掛かる莫大なコストの高さから上級者向け 貴族の職業とも呼ばれている。

調教中のドラゴンに食い殺されたり、逃げられたり、盗賊に奪われたりとリスクも高く、一体の竜を成竜にするまでに最低5千万ボルから500億ボル以上（100ボル＝1円）も掛かる。調教済みの成竜は非常に高値で取引されるため、投資としてこの職業を選ぶ者もいる。

【ハイ・エルフ】

LV1418

LV1103

LV854

LV645

LV888

銃や弓矢などの軽量の飛び道具を得意とし、補助系魔法とスピードに長け汎用性が高いジョブ。

ハイ・エルフでパーティーを組むと大きな加護を得る。同族の数に比例してHPの増大、MPが少量ずつ回復、ラック上昇、経験値

アップ、甦生率アップなどのプラス属性が付加される。

『……囲まれたか』

俺は表向き取り乱さなかったが内心かなり動揺していた。

連中はゆっくりと確実に包囲を狭めて来ている。

まるで遊んでいるよう。

俺の貧弱な装備を見て、もしくは能力値を魔法で確認して、連中はさぞかし見下しているだろう。

だが……舐めるな。

レベルの差や装備の差が勝敗を左右したのは前時代のこと。互いに向き合って立ち止まり、HPの削り合いで勝敗が決したのは前時代こと。

たとえ身体能力は未熟なれど、極限まで鍛え上げたプログラミング技術と操作技術は圧倒的物量差をも撥ね返す力となる。

『死ねやハイエナ野郎!!』

リーダー格っぽい暗黒司教が振りかざした号令の下、統制の執れた横一列で一斉に射撃を開始したハイ・エルフの射手。飛び道具を得意とする奴らハイ・エルフは30mほどの長距離からでも正確無比に矢玉を放って来る。

いくら何でもその距離で当たるかよ。

林の隙間を狙って雨あられと降り注ぐ矢を軽く避け、俺は射線をずらしながら、さらに視界の悪い森林の中へと逃げ込む。

踵を返す直前にチラッと見えた。

白銀の神騎士 いや、装備全部取っ払ったからパンイチのノーマルか。白ブリーフ一丁のそいつが邪覇剣士に黒刀を突き立てられきっちり止めを刺されるのを。

連中はすぐに俺を補足してきた。

竜調教師が解き放つ小型のドラゴン二頭が左右に散開して挟撃を仕掛けてくるが、俺の脚がそれをさせない。左右に大きく膨らんだ敵の包囲網を鍛え上げた鬼脚でグングン引き離す。

俺の脚に追いつけず、近距離視認用マップ上から敵の後続が次々に消えていく。

『この野郎！ アイテム置いてけや！！』

『それ、いくらすっと思ってたんだ！』

特に厄介なのはハイ・エルフのスナイプ野郎。とにかく脚が速くて、追いつかれこしないものの引き離せない。遭遇した戦闘中のパーティーに突っ込んだり、モンスターの群れに突っ込んだりしてなんとか撒こうとするも、一定の距離を維持され追跡を振り切れない。

徒党を組み略奪を生業とするプロの狩人ども。

腕はそれなりに……ということか。

仕方ねえ。まずスナイプ野郎どもを個別に叩く。

俺は後続を十分引き離したことを確認し、方向転換して横道に逸れた。一直線に光の射す森の外へと向かう。

『なる、逃がさねえ！』

『戴きます』

俺が横に移動したロスの分だけ一気に距離を詰められる。だが横一列に並んでいた連中は射線上に一部仲間を配してしまつたために弾幕が薄くなる。

列が整う数秒の時間に体勢を整え、正確に狙つて来た左翼からの狙撃を、俺は大技『土下眠・ローリング』にて緊急回避。「わーい」と言いながら敵の懷に転がり込み、立ち上がると同時に、右端に位置するハイ・エルフ手首を掴んだ。

『わ、わ！！』

完全に不意を衝かれ、驚愕した顔で反射的に握られた手を引くハイ・エルフ。仕掛けた俺は当然ながらその反応を読んでいた。柔術でいうところの”崩し”を仕掛ける。

クンッ

力の流れに逆らわず、手首を極めながら相手の懐に飛び込み、捻って体を崩し、頭から地面に叩き落とす。

完璧なタイミングで入った”崩し”によって、ハイ・エルフは首からゴキツと小気味のよい音を響かせた。これぞ相手の引く力や押す力を利用した『柔』。

俺は起き上がろうとするハイ・エルフの胸板をおもいつき蹴り飛ばし、即座に馬乗りになる。見下ろし型の視点をワンクリックでキャラの視点に合わせ、喉元にナイフを突き立て『カット・スロート』。『一撃必殺』成立である。

1ケタレベルのカスプレイヤーが100倍以上もの力量差を埋めたその事実を目の当たりにし、PKグループを取り巻く風に変化が起こった。子鼠を追い立てるようなハイ・エルフどもの拙速な陣形は警戒に歩を緩め、俺とわずかに距離を置く形で停止する。

『ほう、『やわら』を使いおるか……』

ハイ・エルフの1人に年寄りじみた言葉で感心された。

律儀な俺は言い返してやる。

『まあな』

まだまだこれからだ。

後続が追いつく前にコイツら全員仕留める。

完殺する。その自信はあるんだ。

Lvを上げることによって身体能力は向上するが、肉体そのものの強度は基本的に1と100のLv差があるうと大差ないのだ。防具の隙間から急所を突けば、種族や個体差は勿論あるだろうが、相手は確実に死ぬ。三寸斬り込めば人は死ぬのだ。

そのためか冒険者は優れた武具を求める傾向が強い。

だからこの世界での武器防具の地位は想像以上に高く、現実で高額でのやりとりもめずらしくない。小銭欲しさに俺が外道プレイヤー

ーになるのも無理からぬこと。

俺はフツと息を吐き”キャラの呼吸”を整えると、血塗れのナイフを逆手に持ち替え、ハイ・エルフ達に襲い掛かった。

『目潰しダブル!!』

『ぐわッ!? き、汚エゾッ!?』

俺は地面の土をすくって手近の連中に投げかけた。

不意を衝く右手左手の二連続技に敵はメツチャ怯んだ。

『よっ!』

眼を覆うハイ・エルフBの手首を素早く掴み、グツと引き寄せてから肘を逆関節に極め、そのまま背負い投げで頭から落とす。

『シッ!!』

頭が地面に着く寸前を狙い済まし、ナタを振り下ろすかのような切れ味のロー（下段蹴り）で無防備な頭部を蹴撃。

ビッキィッ!!

『ガッ!?』

ハイ・エルフBの頭部が弾け飛んだかのように大きくブレた。

これぞ陸奥千年が成せる奥義……『雷^{いかづち}!!』

普通に硬い地面に落とした方がダメージでかくねとかいうツッコミはさておき必殺の一撃。防具に護られてない頭部 頸椎へのダメージを狙い打った完璧なクリティカル!! だったが高等種族の持つ肉体の基本スペックの差はやはり埋め難く、この打撃を以ってしても致命にはだいぶ足りない。

『くう……こ、この程度で参るとでも思ってたかよ!!』

『思わない』

簡単に倒れてはくれない。

前回から次いで戦っている俺はそれを充分承知している。

俺は起き上がりを狙ってハイ・エルフBの鼻面に全体重をかけた

膝小僧を叩き込んだ。顎先が撥ね、視界が一瞬泳いだ相手の背後に廻り、ナイフを首筋に立てる。

『ほいつ、頸動脈いただき！』

俺はハイ・エルフBの後頭部に添えた手を前に押し出し、首筋に刃物を這わせる。一般に首を掻き切るときは後ろに反らせるのではなく前に倒す方がより効果的で、YMRの驚異的な物理エンジンはその効果までをも読み取るのだ。

パツクリと開いた首筋から水鉄砲のように赤い筋が噴き出し、一撃必殺を認定されたハイ・エルフBの体は俺の手の中でビクンビクンと跳ね上がった。

【ファルン王国・王宮灰色の尖塔・隠し執務室】

フィールドマップ上の端の端、大陸より南東に位置する島国

『ファルン王国』。

逆賊の謀反によって国主を討たれ、その後は落日を見るが如く果て無き衰退の一途を辿っていた。

前王の死後、恩赦により牢獄に繋がれていた多くの罪人は野に放たれ、徒党を組み再犯に精を出している。

治世は乱れ、人心は腐敗し、人口は瞬く間に半数以下の24万人にまで減少。重税に略奪。金子によって判決が左右する不当な裁判。新天地を求めサーバーを移る者が日に数百人以上。それも日に日に増え、人口減少の傾向は天井知らず。そしてそれは、堅牢なる城壁に護られた城内でも同じであつた。

暴徒に金品を持ち出され壁紙まで剥がされ、瓦礫と埃にまみれた兵どもの夢跡のごとく荒れ果てた城内の一角では、いまだ平和への願いを捨てきれず孤軍奮闘する数名の義士らが集っていた。

エルメスである。

ザクタンクである。

ギボである。

彼女ら三人はある目的でこの国の中枢に根を張っていた。

王が謀殺された直後に発生した大暴動。その混乱にまぎれ謁見のチャンスをつんだ彼女らは新王ノックに能力を買われ、即行で国外脱出を果たした政治屋の代わりに即日要職へと駆け上る。

過程はともかく形だけ大臣となった三人。

課せられた初仕事は数万数十万とも推定される暴徒の鎮圧。

密約により強力な私兵を擁する海商王を動かし、祭りに参加したがる兵をアメとムチで統制し、アホな国王を丸め込んで事態を上手く収めた彼女達は今、城に併設された螺旋階段が続く塔の五階、数人どうにか立って居られる程度の狭い隠し部屋に一同は介していた。姿かたちは見えない。

代わりに部屋の中央を占拠するのは、小汚い頑丈そうな丸机の上にメロンほどの水晶球が三つ。水晶の中にはぼんやりとゆらめく人型の映像だけが浮かんでいる。

それは映像と音声を伝達できる”風巻きの魔導球”。

十段階に設定されているレア度で八を数える密談用のアイテム。たがいが認証しなければたとえ部屋の真ん中で聞き耳を立てようと、いかなる魔導や道具を用いても音声映像は他に漏れることはない。

エルメス『なんかヤバイですね、この国』

ザクタンク『海外のBBSでも凄い盛り上がってましたよ。……史上最悪の”暴君”って、ゲーム雑誌の『死ねこの野郎 読者が選ぶ最悪プレイヤーランキング』にも入ってるし』

エルメス『城で働いていた人もだいぶ少なくなっちゃって、ずいぶん寂しくなりましたね。公園広場で革命の集いを宣言する張出しがありましたけど、どうせあれも鎮圧されるんでしょうねえ』

ザクタンク『アイツらがいますからね。国王直属の最強十二の円卓の騎士！！ な〜んて聴こえはいいですが、ノック王が”エドの祠”の独占探索権を与え飼いならした無頼者の集まりでしかない』

エルメス『王様が率先して賄賂やってんですから、みんな上に倣っちゃって。いま行政に残ってるのは利権絡みで懷を潤す狒々どもしかいない』

ザクタンク『由々しいですな』

エルメス『いやいや、まったく』

ザクタンク『でも王様が流入者をカットしたお陰でサーバー全体が軽くなった感じがするのはいいですね』

エルメス『鬱陶しい勧誘の類もだいぶ減りましたし、探索者の大幅加入でダブついていたレアアイテムの貿易赤字も市場が安定して、来期は黒字に戻りそうですし』

ザクタンク『まさか、狙ってやったとか……？』

エルメス『ないない。それは無いですよ。今回は偶然がたまたま重なっただけです。この先はもつと混乱しますよ』

ザクタンク『ハハ、そうですねえ』

ギボ『ちよつと！　いつまでも油売ってないで仕事してよ！』

ザクタンク『おつと。やれやれ、うるさいのが来た。じゃ、そろそろ始めますかな、内務大臣殿』

エルメス『はいはい、行政大臣殿』

ギボ『えー、今回はちよつと厄介な相談です。フィールド上で装備品をPKプレイヤーに略取されたそうなんです、何でも持ち主に無断で使ったキャラだったそうで、被害者は装備品の返還を求めているんです』

ザクタンク『一部地区を除いて、この国ではアイテムの奪い合いを認めている。……まあ推奨はしていないが、べつに法に反してはいないだろ？　何故そんな話を？』

ギボ『そうなんですけどね。盗られたって装備品が、その……非常に高額なんです。闇値（リアルでの売値。世界的に人気を博しているYMR世界で出現するレアアイテムや貨幣は現実でも高価で取引

され、その儲けを専門に狙った略奪者や商人がYMR世界に多数存在し、しばしば問題になっている。YMRを企画したイギリス企業ヴェイン株式会社はプレイヤー達に厳重な注意を勧告しているが法的強制力は未だに無いため、実際では野放しになっているのが現状である）で二千万……」

ザクタンク「え……二千万？ それ……マジ？」

ギボ「マジです」

エルメス「ちよつと、いったい何のアイテムです？ 尋常な金額じやありませんよ！？」

ギボ「前々回のYMRで猛威を振るっていた魔王四將軍の1人、『バチッド』が所有していた、『バチッドの玉兇器』です。特殊効果は全魔法完全無効化」

ザクタンク「世界に一個しかない超レアアイテム？ それも2期前の？ すげえの持ってたなあ。宮仕えには一生お眼にかかれないモンだね。いやしかし、そんな大金出して買う人がいるとはね……」

エルメス「でも実際売れるんですよ。1円を盗んでも100万円を盗んでも泥棒は泥棒……なんて言いますけど、やはり1円の盗人相手に司法は動かないですよ？ 現金なもので。でも千万単位となればもう、我々が介入すべき問題です。辺に噂が広がって上へ下へと大騒ぎ立てられる前に、ここはそのラッキーな盗人さんを召喚して穏便に返してもらいますか？ まあ、国庫からいくらか親切に対応する報奨金を出すということで」

ギボ「そんな悠長なことで大丈夫ですか？ 取引される前に軍を動かして捕縛しようよ！ いますぐ！」

ザクタンク「あんまり無茶やったら、ますます人口が減ってしまわないか？」

ギボ「だからっ、悠長なことを言っている間に……！」

エルメス「金額の多寡に眼を奪われて僕達が規律を乱すわけにもいかないでしょう。僕達はいくまで第三者、中立な立場で物事を裁かなければなりません。軍は動かしません。当然でしょ？ とにかく

使者を出して返還を呼びかけましょう』

ザクタンク『ま、妥当ですか』

ギボ『…そ、そんなだからッ!! 後でどうなっても知りませんよ!!』

ザクタンク『おやおや、怒らせてしまいましたな』

エルメス『この件は僕に一任してくれませんか? 迷惑はかけませんから』

ギボ『……物好き』

立ち去ったはずのギボが戻って来た。

因果応報ハイエナ稼業

【ファルン王国・荒野のフィールド】

『ふう……』

ハイ・エルフの一団をどうにか始末した俺は一息吐く。

肌着程度しか身に着けていない俺のタクじゃかすただけでも即死だったろうが、遠距離攻撃に特化したハイ・エルフ達は接近戦が不得手だと踏み、徹底したイン・ファイトで“一撃必殺”を狙った。肌が触れ合うような距離から複数を相手に大立ち回り。

数分後には喉を掻き切られた死体が五つ。

俺はほぼ無傷だった。

『……………』

マップで周囲に敵の気配が無いのを確認し、乾いた赤土の上に横たわる死体からアイテムを回収するべく動くと　不意に、青い無数の光輪が死体の前で噴き上がった。

『な……ん！？』

突然のことに俺は息を呑む。

光輪の中から徐々に人の輪郭が浮かび上がり、光の輪が粒子となつて大気に溶けると、その中から出て来たのは……先ほどの”PK”ども。

竜調教師や邪覇剣士。

そして暗黒司教。

『キョラキョラキョラ……！！　逃げられませんよ……この包囲からはね。そして、この『DEATH』……からはね！！』

暗黒司教が妙に皺枯れた声で俺に凄んだ。

厚く丈の長い丈夫そうな灰色のフードを目深に被り、青白く細枝のような腕に幾つもの宝石を詠えた金の腕輪をジャラジャラとさせ、暗黒司教『DEATH』は一斉に仲間を解き放った。

迅い！！

俺が身構えるよりも早く、一瞬にして視界から掻き消えた邪覇剣士二人が背後に回った。必死に逃げようと振り返るも、こちらの動きを予期していたかのように肩口に黒刀を突きつけられそれを封じられる。

『パーティー登録した人間とは、どこにいても”ポータル”で合流出来る……なんて初歩的なこと、寂しい寂しい単独プレイじゃ知らなかったかい？』

『……くっ！』

邪覇剣士の1人が下卑た笑いを浮かべた。

魔法やアイテムでパーティーが合流出来ることは知ってる。

でも逃げるのに必死で全然思い浮かばなかった。

どこを見ても敵、敵、敵、敵。絶体絶命のピンチだ。

どうあがいても逃げられる隙など見当たらない。

『ち、畜生ッッ！！』

イチかバチか、俺は転送ポータルの巻物をアイテムソケットから引っぱり出し、街への帰還を試みた。が、地面に放り投げた巻物が青紫色の光輪を浮かべた瞬間、何故かそれは光の粒となって掻き消えてしまった。

『??? な、なん……？』

驚愕に言葉を失ったその直後、DEATHの放った召喚魔導

『三つ首雷竜の紫電』ドレイゼン・スベル・ヴェノムが俺を一瞬にして焼き焦がした。

暗転。

災い転じてハイエナ稼業

「クソッ！」

現実世界の俺は机を強打した。

やられた。完全にやられた。

死体に重なるように表示されたダイヤルログの『街へ戻りますか？』のYES/NOに従い、俺は半強制的に街の入り口まで戻される。

奪い取ったアイテムがなんたるかをじっくり見る前に狩り殺されてしまった。クズどものアイテムなど物色せずにそのまま逃げたければ……たぶん逃げ切れた。

痛恨のミスだ。

所持金0、経験値0、フィールドにブチ撒けたアイテムと装備品は今頃連中に物色されているだろう。

「……て、あれ？」

ふと、俺はPC画面上に映るタクを見て眼を疑った。

外装に変化がない。衣服を纏いナイフを所持している。装備品がそのまんま。びっくりしてステータス画面を開く。とそこには高いレア度を示す緑や黄色表示のアイテムがズラリ。

『バヂツドの玉兇器』 レア度10

旧・人魔大戦で、人類側を恐怖に陥れた焰の魔王バヂツドが持つ、魔法完全無効化能力を秘めた碧の卵。

『邪神の籠手』 レア度9

聖神の雷により朽ちた古き邪神の腕。

常時8倍プロテクト。

最速クイック攻撃が可能。

『魔神の首飾り』 レア度9

異界神の黒き血、デモン・ブラッドの力を内に秘めた首飾り。

HPとMPの半分を消費して異世界より訪れし七の魔人のいずれかを召還する。

防御力三倍。

食事を摂らなくともステータスが減少しない。

凍結無効化。

『ガイナス・ヘルム』 レア度8

大陸を制覇した伝説の霸王『ガイナス・ラグルド』が頭上に頂く漆黒の兜。

イノセンス上昇。

ステータス正常のまま常にバーサク状態。

絶対の確率で物理攻撃カウンター。

85%の確率で魔法反射。

『デモン・プレート』 レア度8

地獄の業火によって鍛え上げられた白銀の鎧。

アイテム出現率70%上昇。

蘇生全回復確率80%。

ステータスや所持品を丸裸にされる『^{アンサー}調査』を防ぐ。

『死海の宝玉』 レア度6

持つだけで幸せになる、深海微生物の集合体が化石化した白い宝玉。

ラック上昇40%。

50%の確率でステータス異常回復。

そして所持金235ボル。

「.....」

俺はしばらく呆然としていたと思う。

心臓がばくばく鳴って、キーボードを打つ指先が震えて止まらない。

死亡したにもかかわらず何のペナルティも貰わなかった不可解な現象は置いといて、見たことも無いようなレア度の武器、防具、装飾品がアイテムソケットいっぱいに収まっている。

「やべえ、やべえよ……これはやばい……」

頭が混乱してきた。息は切れ、脈拍は定まらず、自然とひと気の無い場所へと足が向う。

何だか周りの人間全てが敵に見えた。

『護りのタリスマン』 レア度5

アイテムソケットに入れて置けば、死亡時のペナルティ帳消しと引き換えに消滅する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1880z/>

外道の王

2011年12月7日22時49分発行